

栃木県ヤングケアラー実態調査 調査結果（速報値）

1. 調査の概要

（1）調査の目的

本調査は、県内の児童・生徒における家族の世話の状況やそれに伴う日常生活への支障、支援のニーズ等とともに、各学校における対応状況等について把握し、ヤングケアラーへの支援策の検討を行うための基礎資料とすることを目的として実施した。

（2）調査対象

①児童・生徒向け調査

県内の公立及び私立学校（分校、義務教育校、中高一貫校、定時制及び通信制を含む）の以下の学年に在籍する児童・生徒

小学6年生	約 16,800 人（350 校）
中学2年生	約 17,600 人（165 校）
高校2年生	約 17,600 人（85 校）

②学校向け調査

県内の公立及び私立学校（分校、義務教育校、中高一貫校、定時制及び通信制を含む）

小学校	350 校（公立 349 校、私立 1 校）
中学校	165 校（公立 158 校、私立 7 校）
高等学校	85 校（公立 70 校、私立 15 校）

（3）調査期間

①児童・生徒向け調査

令和4年7月5日（火）～令和4年7月31日（日）

②学校向け調査

令和4年7月6日（水）～令和4年8月19日（金）

（4）回答方法

①児童・生徒向け調査

1人1台端末（タブレット）を用いた Web 上での回答を基本とし、学級時間やロングホームルーム等、学校時間を活用して調査を実施した（学校時間内の実施が難しい場合は自宅等からの回答も可）。なお、調査の実施に先立ち、ヤングケアラーに関する啓発を実施することとした。

②学校向け調査

Web 上での回答を基本とし、調査を実施した。

（5）概要書の見方

回答は各質問の回答者数（n）を基数とした百分率（%）で示してある。また、小数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳の合計が100.0%にならない場合がある。

複数回答が可能な設問の場合、回答者が全体に対してどのくらいの比率であるかという見方になるため、回答比率の合計が100.0%を超える場合がある。

図表中の選択肢表記は、語句を短縮・簡略化している場合がある。また、回答比率が0.0%の場合は比率を表示していない。

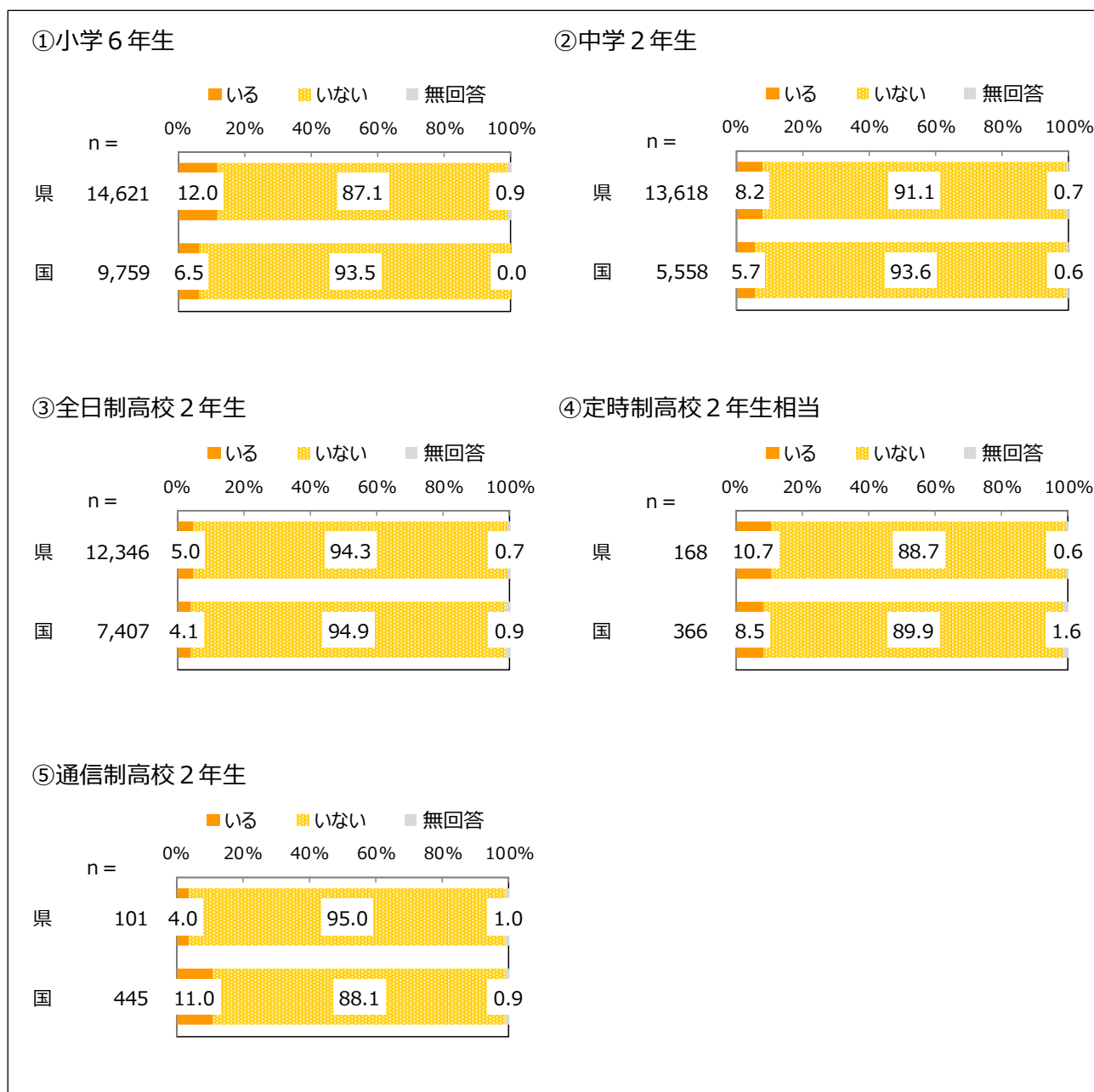
一部の設問は、国の調査結果と比較をしているが、中学校、高校、中学２年生、全日制高校２年生の結果は、厚生労働省「ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」（令和３年３月）、小学校、小学６年生の結果は、厚生労働省「ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」（令和４年３月）にて公表されている結果と比較をしている。

国の調査との比較やクロス集計の分析で、分析の軸（＝表側）が対になっている項目については、比率の差を記述している。その表現は％ではなく、ポイントであらわすこととしている。

２．児童・生徒向け調査

（１）お世話をしている家族の有無

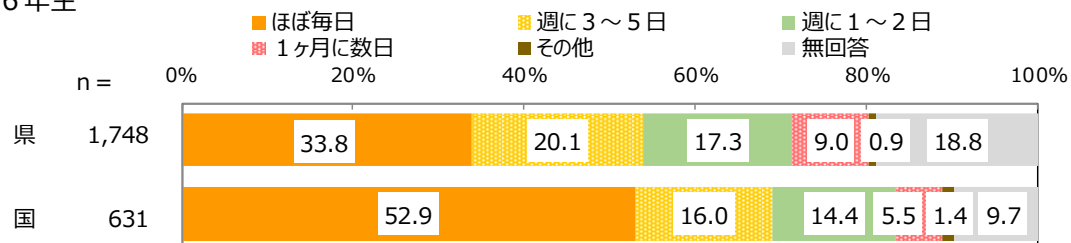
- ・お世話をしている家族が「いる」割合は、小学６年生で 12.0%、中学２年生で 8.2%、全日制高校２年生で 5.0%、定時制高校２年生で 10.7%、通信制高校２年生で 4.0%となっている。
- ・国の調査と比較すると、お世話をしている家族が「いる」割合は、小学６年生、中学２年生、全日制高校２年生、定時制高校２年生で県が国よりも高く、特に小学６年生は県が国よりも 5.5 ポイント高くなっている。



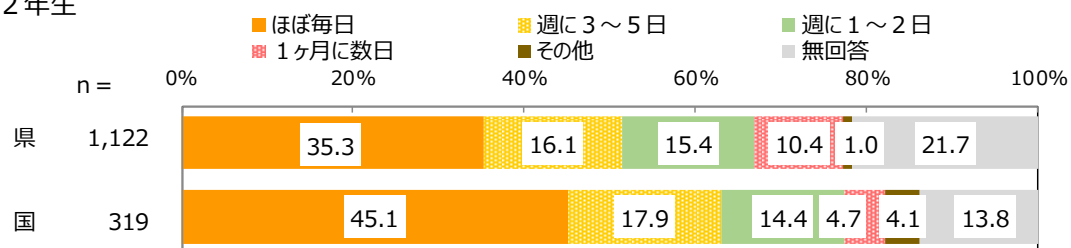
(2) お世話をしている頻度

- ・ お世話をしている頻度は、いずれも「ほぼ毎日」の割合が最も高く、次いで「週に3～5日」の割合が高くなっている。
- ・ 国の調査と比較すると、いずれも県、国ともに、「ほぼ毎日」の割合が最も高くなっているが、小学6年生で県が国よりも19.1ポイント、中学2年生で県が国よりも9.8ポイント、全日制高校2年生で県が国よりも10.2ポイント低くなっている。

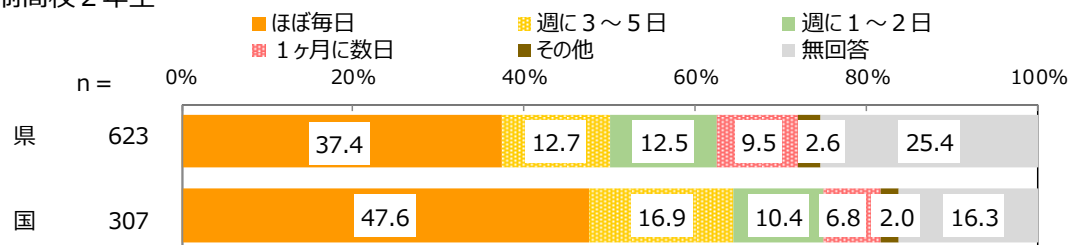
①小学6年生



②中学2年生



③全日制高校2年生

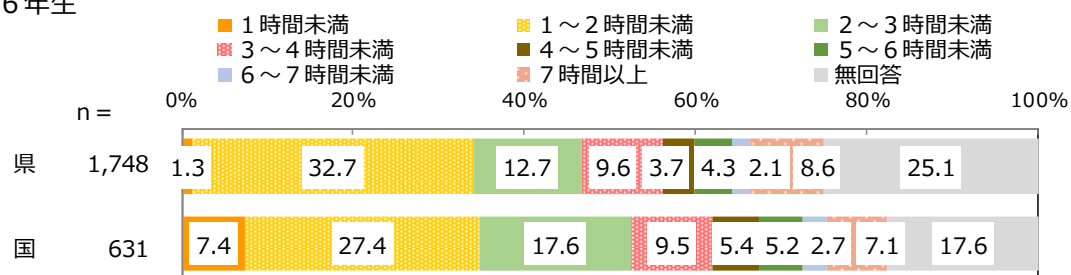


(注) 定時制高校2年生相当、通信制高校2年生相当は、調査数が少ないため掲載しない。

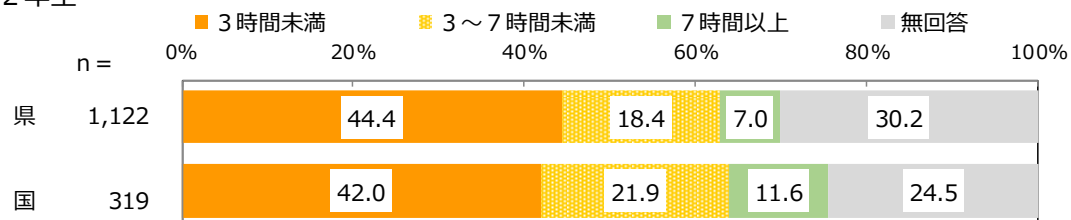
(3) 平日 1 日あたりにお世話に費やす時間

- ・ 平日 1 日あたりにお世話に費やす時間は、小学 6 年生で「1 ～ 2 時間未満」の割合が最も高く、中学 2 年生、全日制高校 2 年生では「3 時間未満」の割合が最も高くなっている。
- ・ 国の調査と比較すると、小学 6 年生で「1 時間未満」の割合は県が国よりも 6.1 ポイント低い一方、「1 ～ 2 時間未満」の割合は県が国よりも 5.3 ポイント高くなっている。中学 2 年生で「7 時間以上」の割合は県が国よりも 4.6 ポイント、「3 ～ 7 時間未満」も県が国よりも 3.5 ポイント低くなっている。全日制高校 2 年生では「3 ～ 7 時間未満」は県が国よりも 5.6 ポイント低い一方、「3 時間未満」は県が国よりも 4.2 ポイント高くなっている。

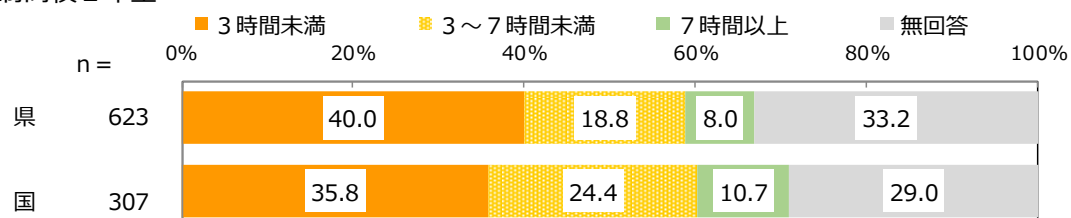
①小学 6 年生



②中学 2 年生



③全日制高校 2 年生



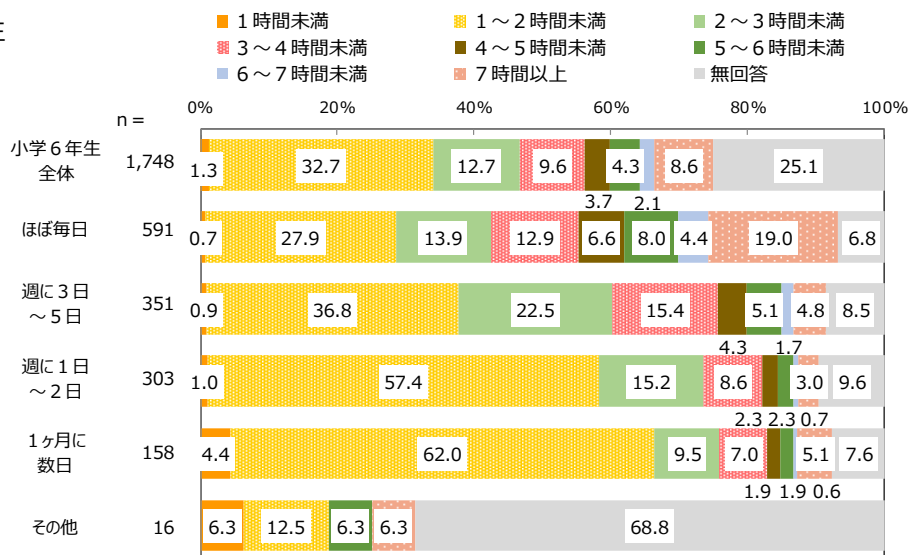
(注 1) 定時制高校 2 年生相当、通信制高校 2 年生相当は、調査数が少ないため掲載しない。

(注 2) 時間の区分は国の調査にあわせて設定している。

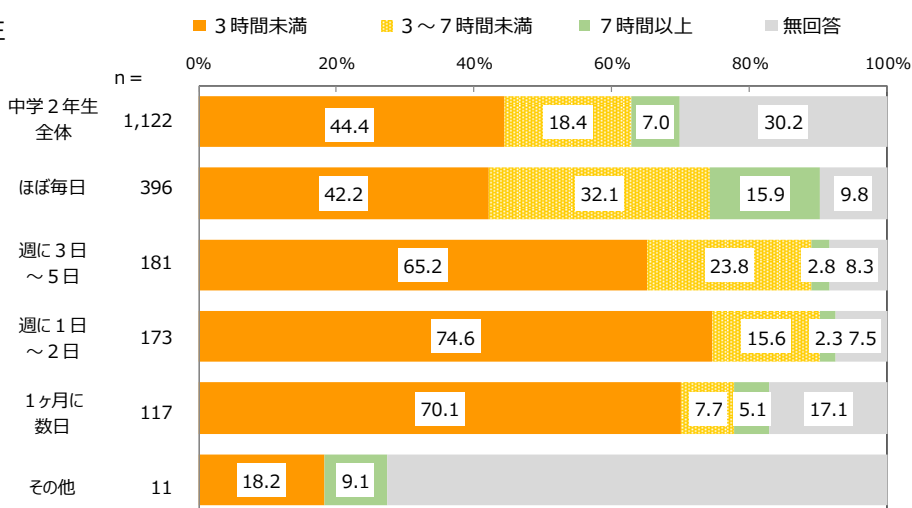
(4) 平日 1 日あたりにお世話を費やす時間（お世話をしている頻度別）

- ・ 平日 1 日あたりにお世話を費やす時間をお世話をしている頻度別でみると、小学生 6 年生では「1 ～ 2 時間未満」の割合が「週に 1 日～ 2 日」、「1 カ月に数日」で高く、中学 2 年生、全日制高校 2 年生では「3 時間未満」の割合が「週に 1 日～ 2 日」、「1 カ月に数日」で高くなっている。一方、いずれも「7 時間以上」の割合が「ほぼ毎日」で高くなっている。

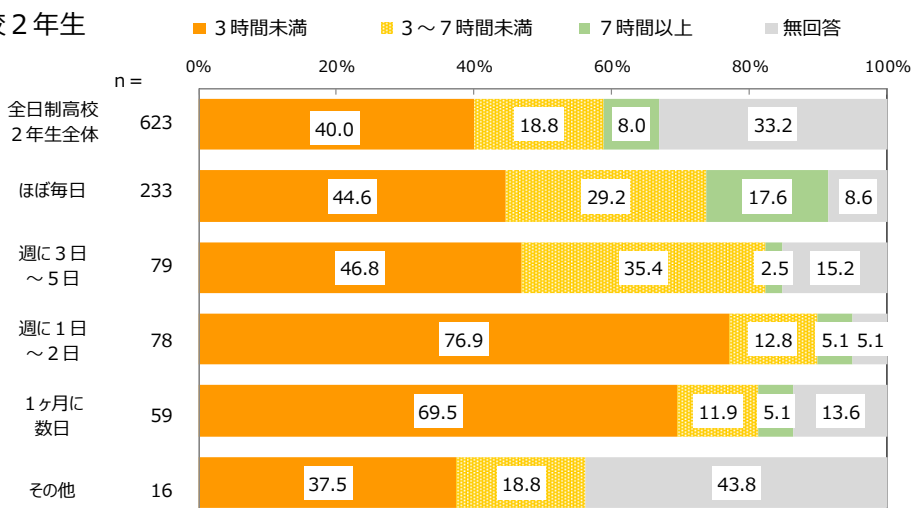
① 小学 6 年生



② 中学 2 年生



③ 全日制高校 2 年生

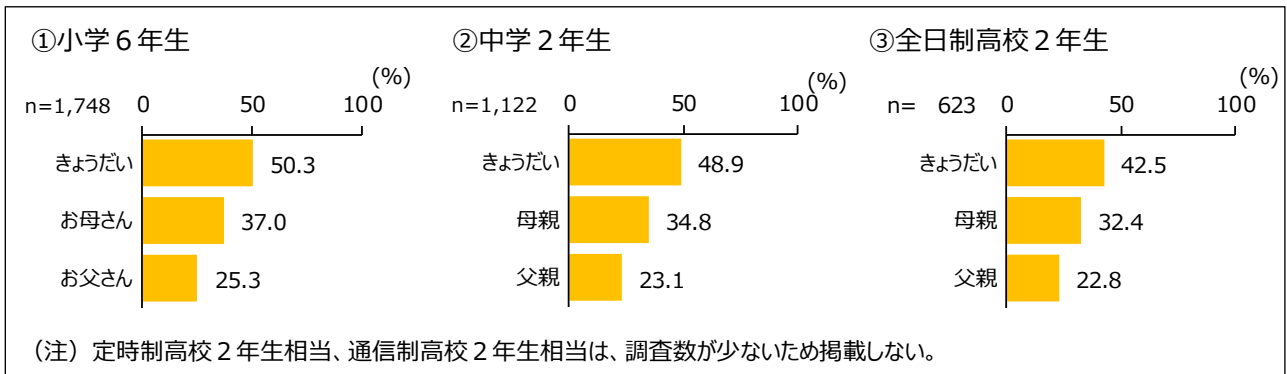


(注 1) 定時制高校 2 年生相当、通信制高校 2 年生相当は、調査数が少ないため掲載しない。

(注 2) 時間の区分は国の調査にあわせて設定している。

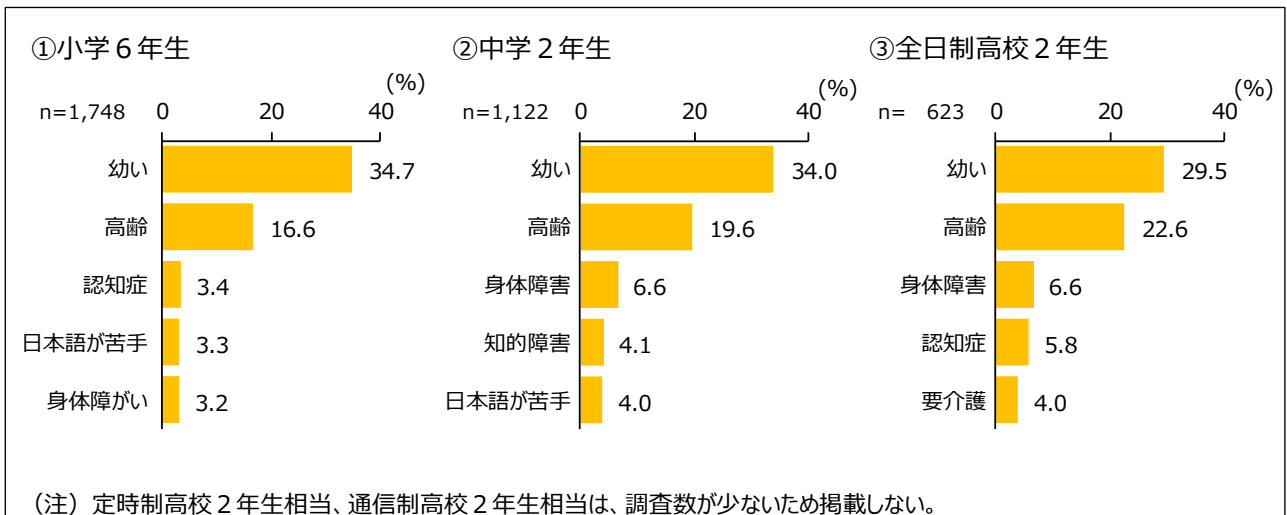
(5) お世話を必要としている家族（上位3項目）

- ・ お世話を必要としている家族は、いずれも「きょうだい」の割合が最も高く、次いで「母親（お母さん）」の割合が高くなっている。



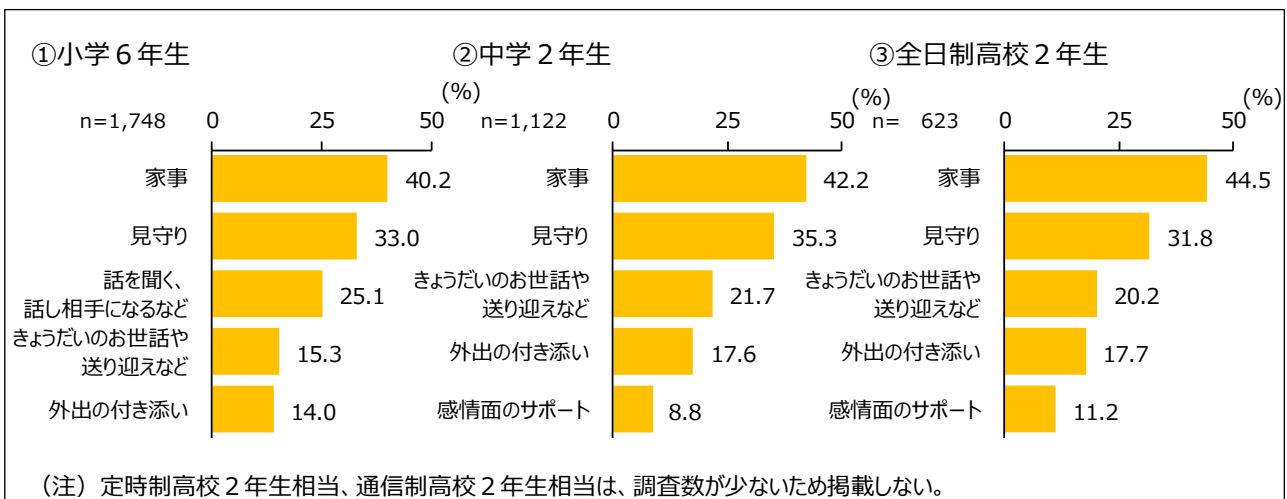
(6) お世話を必要としている人の状況（上位5項目）

- ・ お世話を必要としている人の状況は、いずれも「若い」の割合が最も高く、次いで「高齢（65歳以上）」の割合が高くなっている。



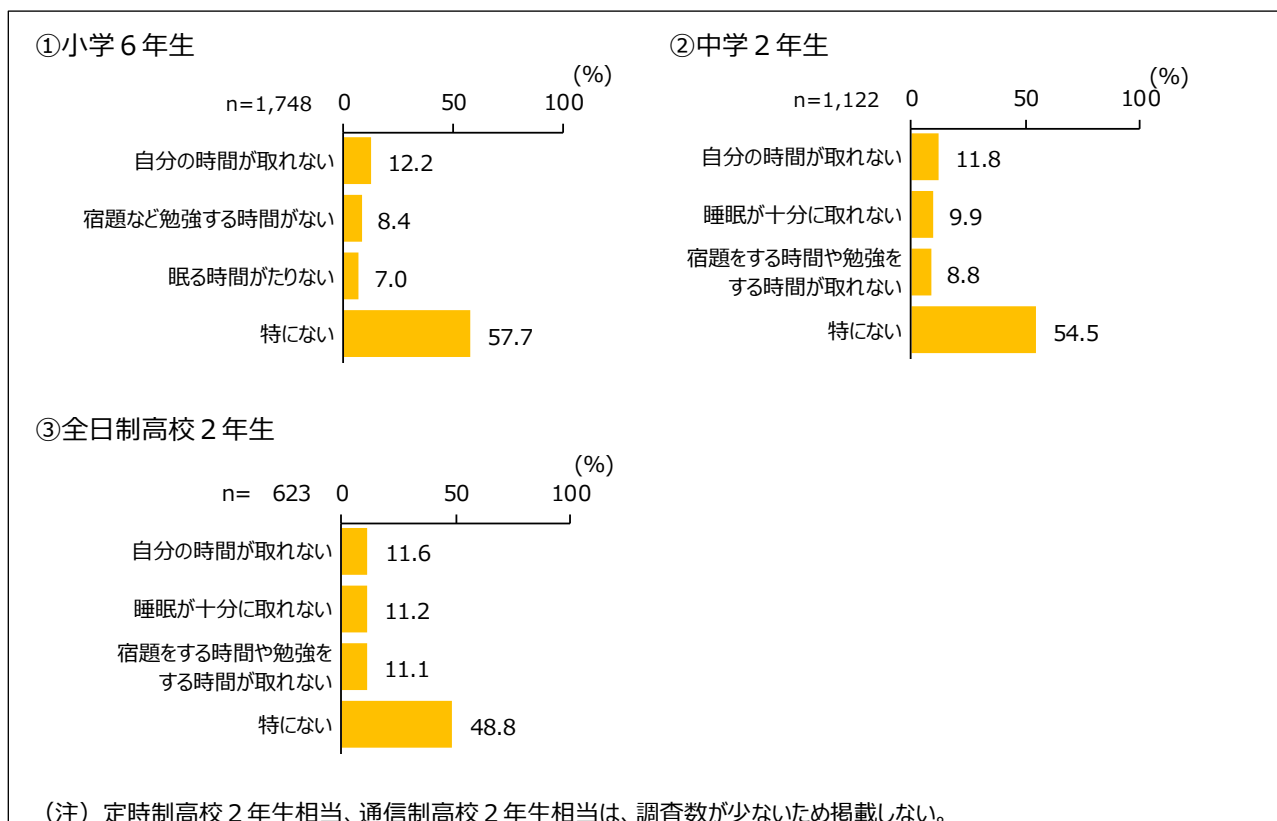
(7) お世話の内容（上位5項目）

- ・ お世話の内容は、いずれも「家事」の割合が最も高く、次いで「見守り」の割合が高くなっている。



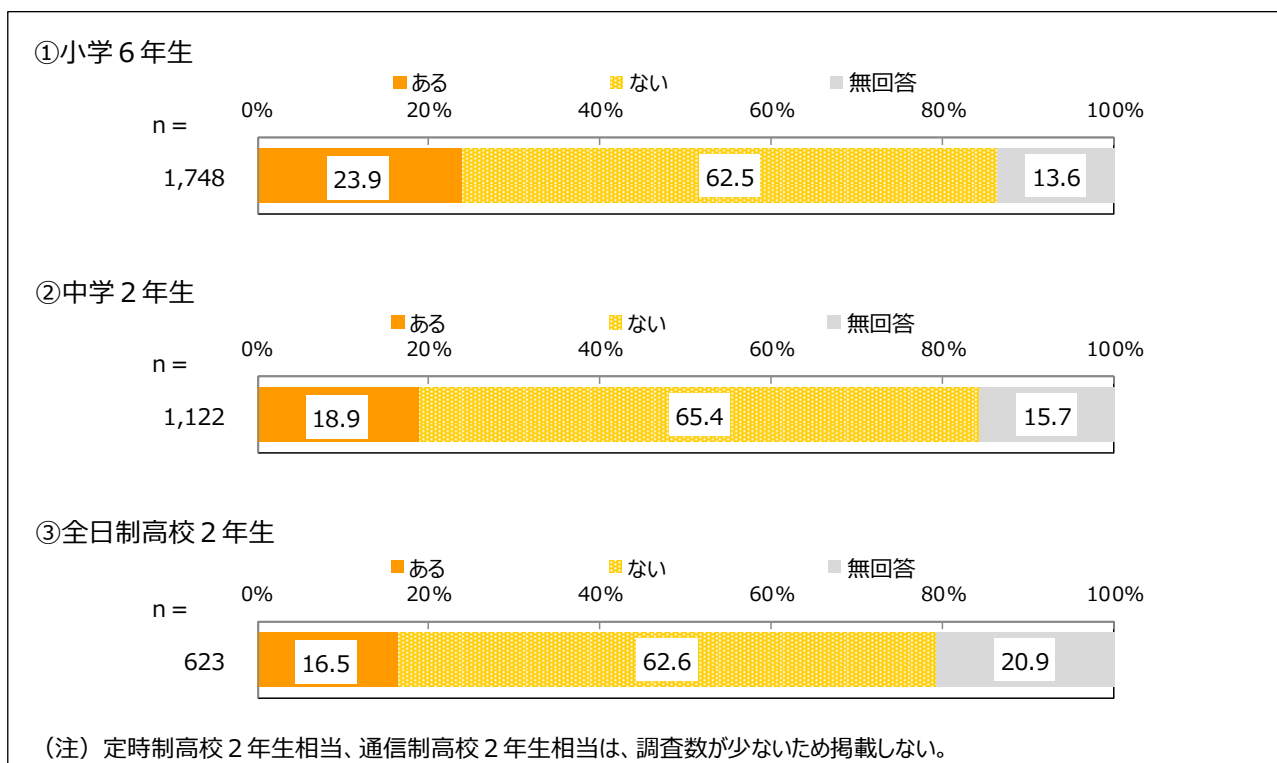
(8) お世話をしていることでやりたいけど出来ていないこと（上位3項目+「特になし」）

- ・ お世話をしていることでやりたいけど出来ていないことは、いずれも「特になし」の割合が最も高くなっているが、「特になし」を除くと「自分の時間が取れない」の割合が最も高くなっている。



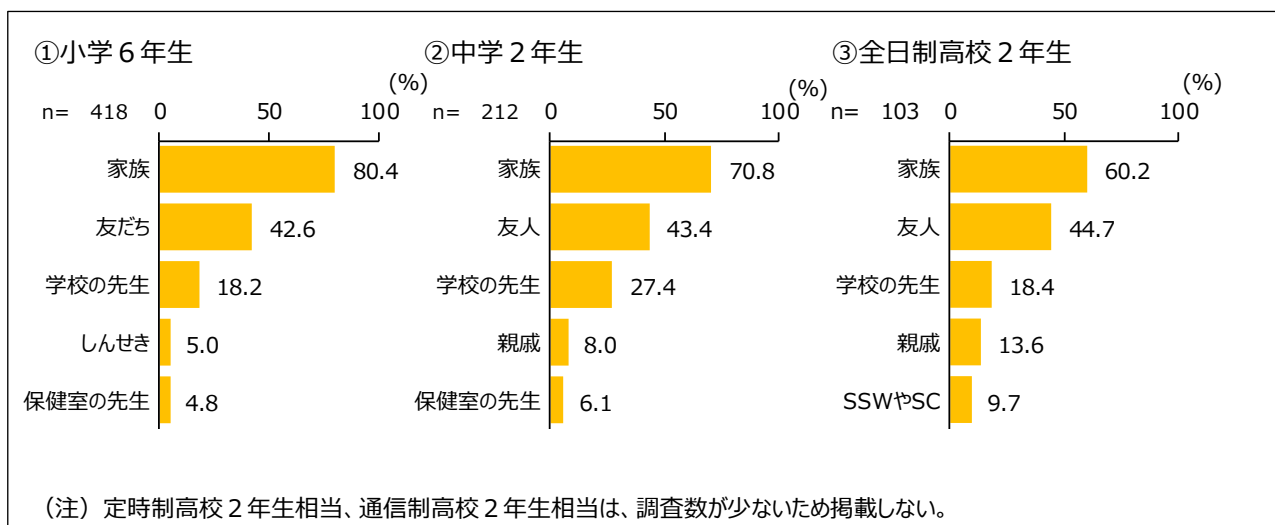
(9-1) お世話について相談した経験

- ・ お世話について相談した経験が「ある」割合は、小学6年生が23.9%、中学2年生が18.9%、全日制高校2年生が16.5%となっている。



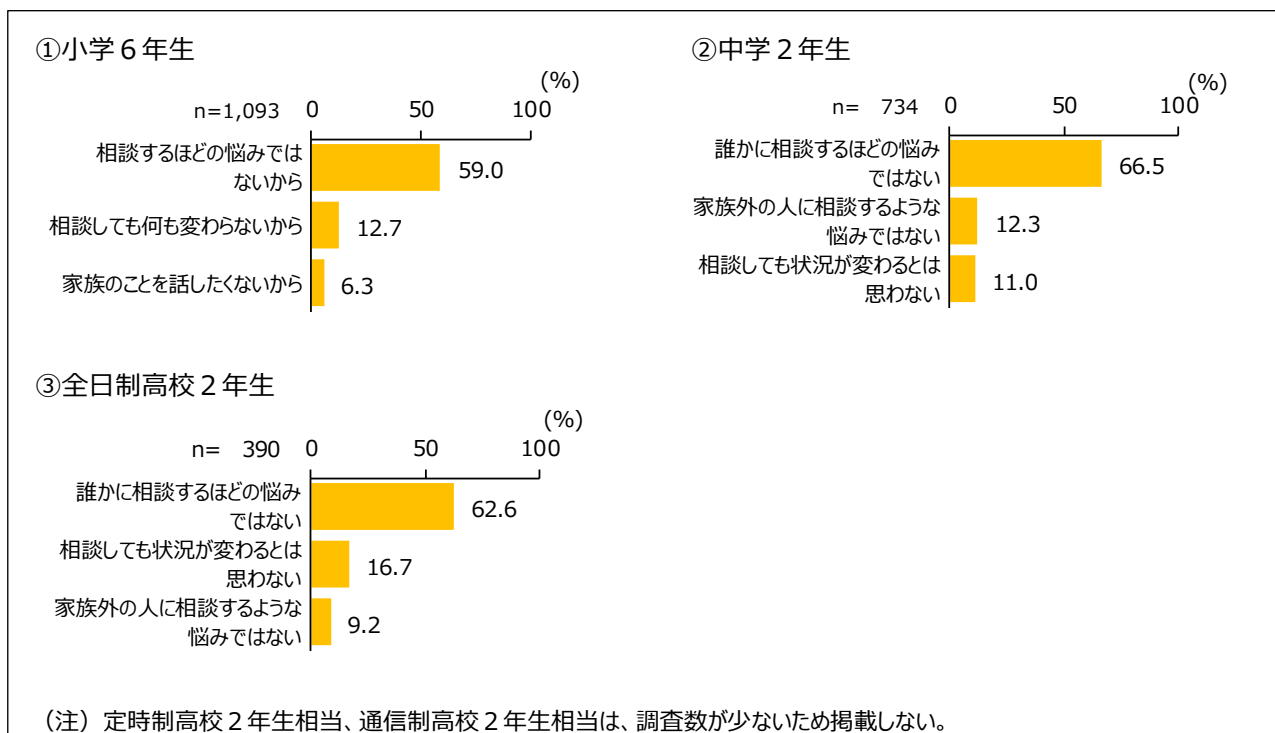
（９－２）お世話についての相談相手（上位５項目）

- ・ お世話についての相談相手は、いずれも「家族」の割合が最も高く、次いで「友人（友だち）」の割合が高くなっている。



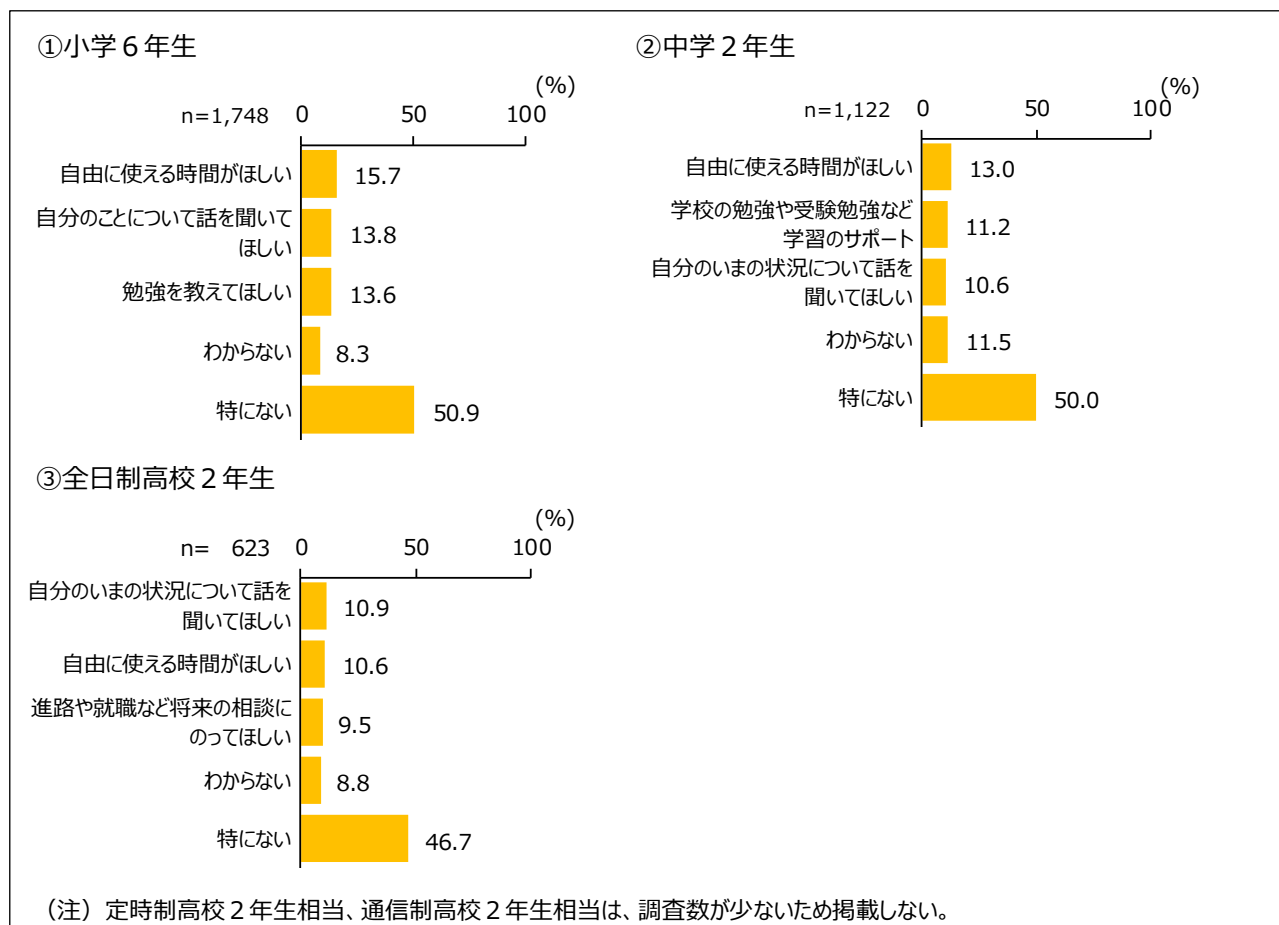
（９－３）お世話について相談したことがない理由（上位３項目）

- ・ お世話について相談したことがない理由は、いずれも「相談するほどの悩みではないから」の割合が最も高く、次いで小学６年生では「相談しても何も変わらないから」、中学２年生では「家族外の人に相談するような悩みではない」、全日制高校２年生では「相談しても状況が変わるとは思わない」の割合が高くなっている。



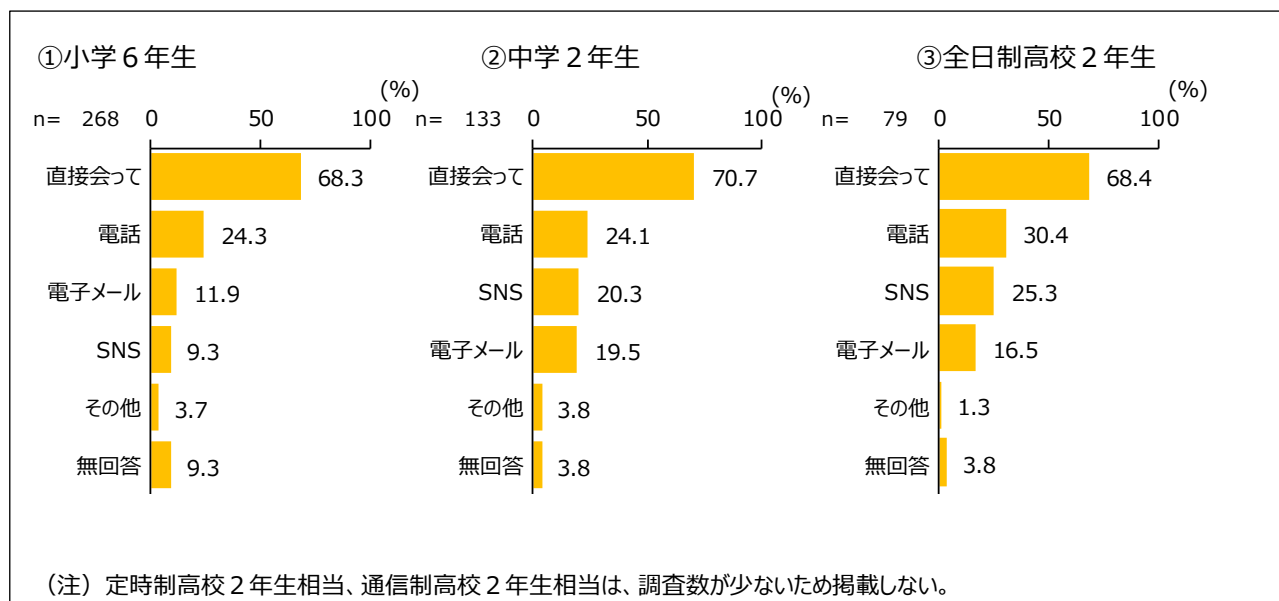
(10) 学校や大人に助けてほしいこと、必要な支援（上位3項目+「わからない」「特にない」）

- ・ お世話について相談したことがない理由は、いずれも「特にない」の割合が最も高くなっているが、「特にない」を除くと小学6年生、中学2年生で「自由に使える時間がほしい」の割合が最も高くなっている。全日制高校2年生では、「自分のいまの状況について話を聞いてほしい」の割合が最も高くなっている。



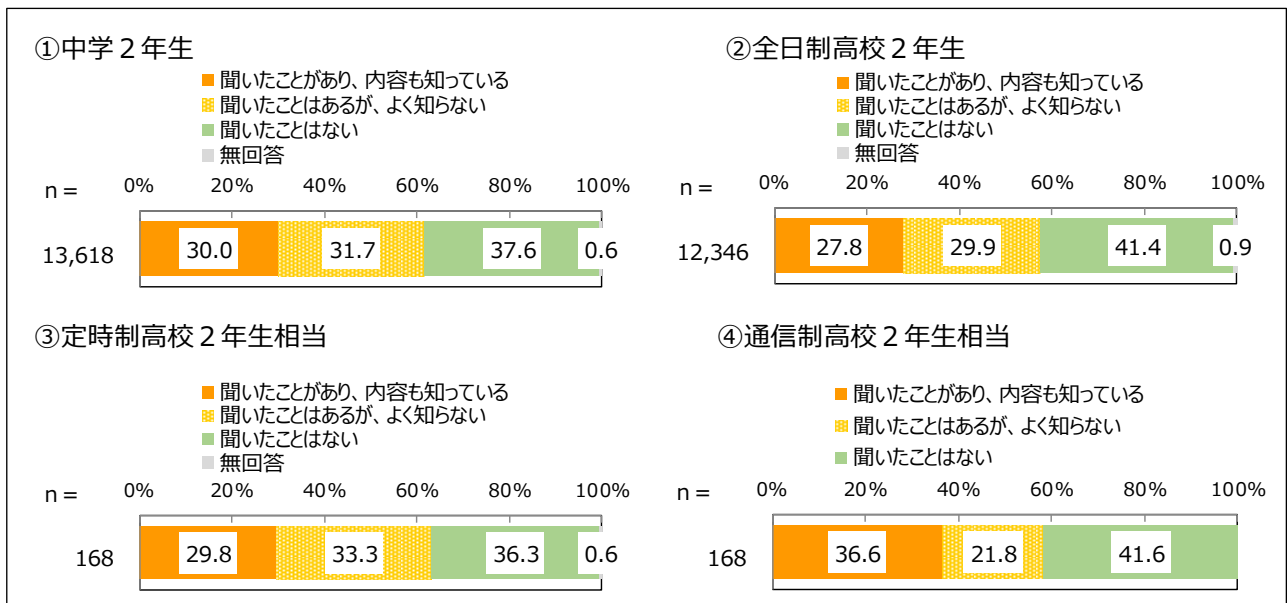
(11) 相談する手段

- ・ お世話について相談する手段は、いずれも「直接会って」の割合が最も高く、次いで「電話」の割合が高くなっている。



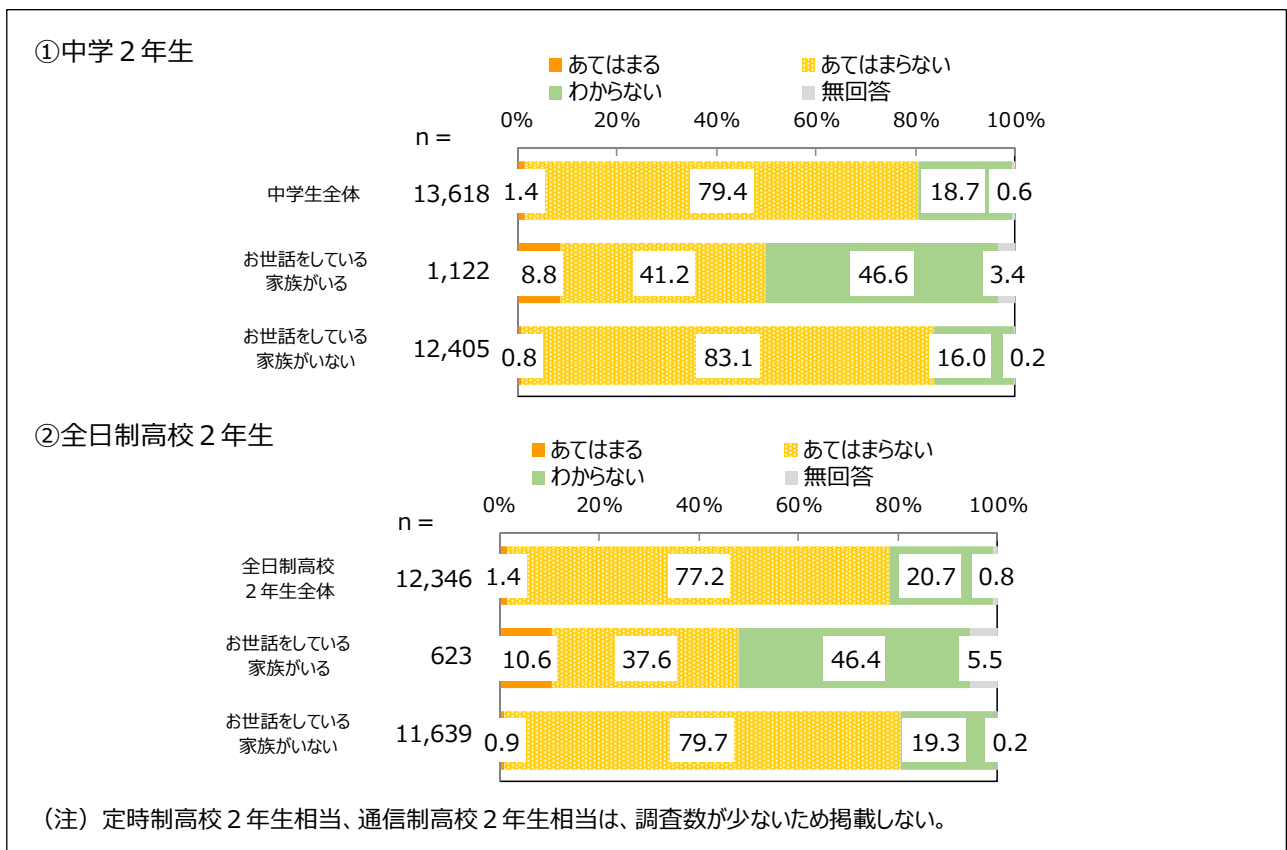
(12) ヤングケアラーの認知度

- ・ ヤングケアラーの認知度は、いずれも「聞いたことはない」の割合が最も高く、次いで中学 2 年生、全日制高校生、定時制高校生で「聞いたことはあるが、よく知らない」、通信制高校生で「聞いたことがあり、内容も知っている」の割合が高くなっている。



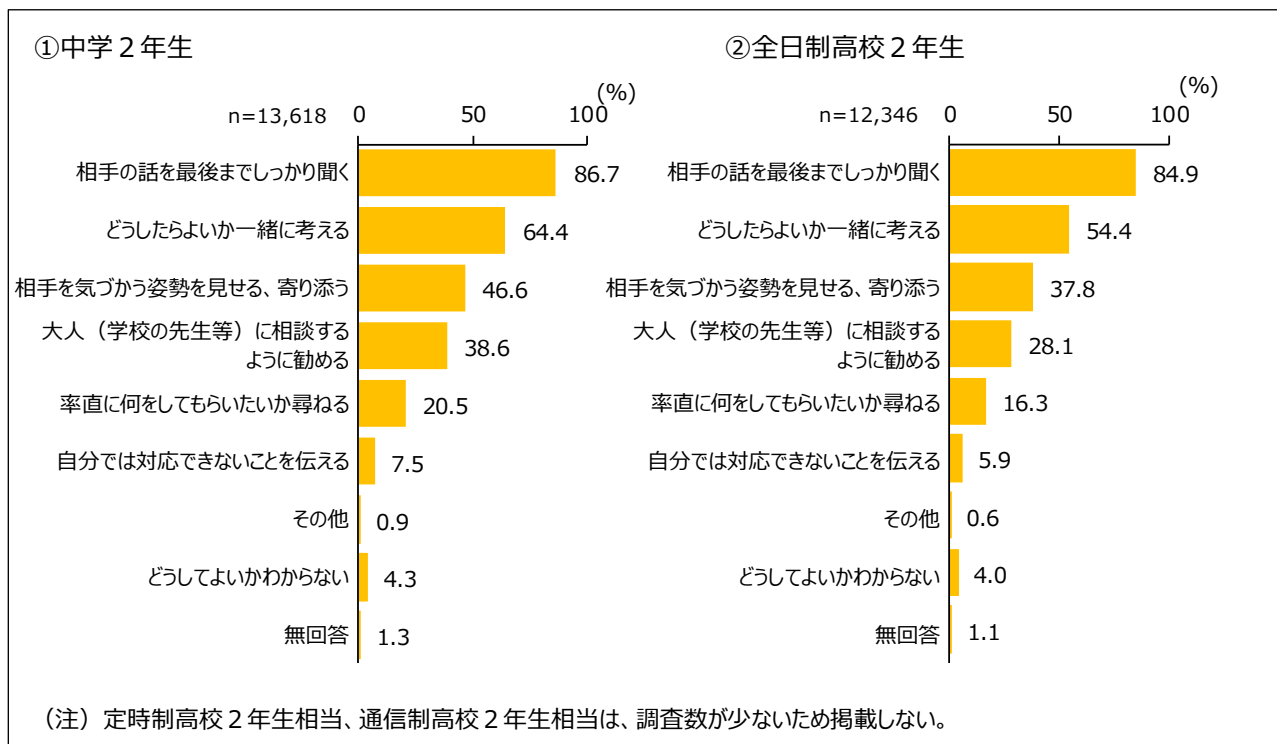
(13) ヤングケアラーの自覚

- ・ ヤングケアラーの自覚は、中学 2 年生で「あてはまる」が 1.4%、「あてはまらない」が 79.4%となっている。全日制高校 2 年生でも「あてはまる」が 1.4%、「あてはまらない」が 77.2%となっている。
- ・ お世話をしている家族の有無別でみると、中学 2 年生の“家族のお世話をしている”人で「あてはまらない」が 41.2%、全日制高校 2 年生の“家族のお世話をしている”人で「あてはまらない」は 37.6%となっている。



(14) お世話の悩みを相談されたらどのような対応をとるか

- ・ お世話の悩みを相談されたらどのような対応をとるかは、いずれも「相手の話を最後までしっかり聞く」の割合が最も高く、次いで「どうしたらよいと一緒に考える」の割合が高くなっている。

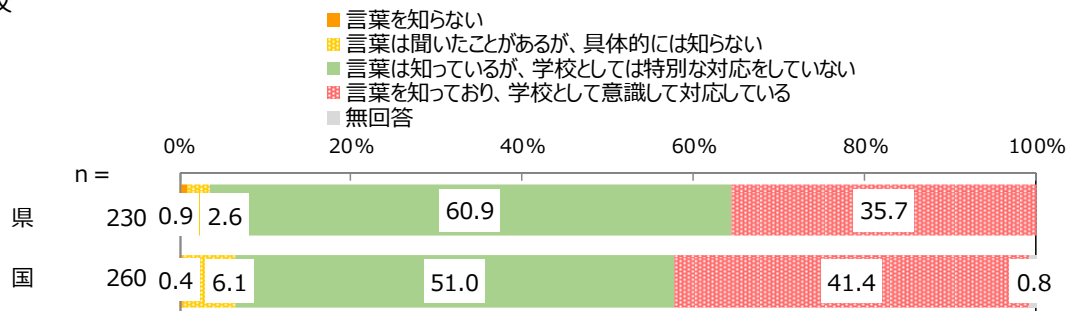


3. 学校向け調査

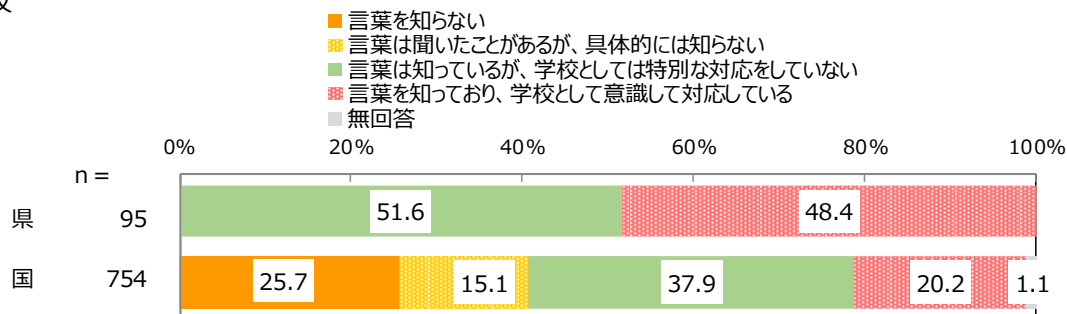
(1) 「ヤングケアラー」という概念の認識

- ・「ヤングケアラー」という概念の認識は、いずれも「言葉は知っているが、学校としては特別な対応をしていない」の割合が最も高くなっている。
- ・国の調査と比較すると、中学校、全日制高校で「言葉を知っており、学校として意識して対応している」は県が国よりも高く、中学校では県が国よりも 28.2 ポイント、高校では県が国よりも 24.5 ポイント高くなっている。

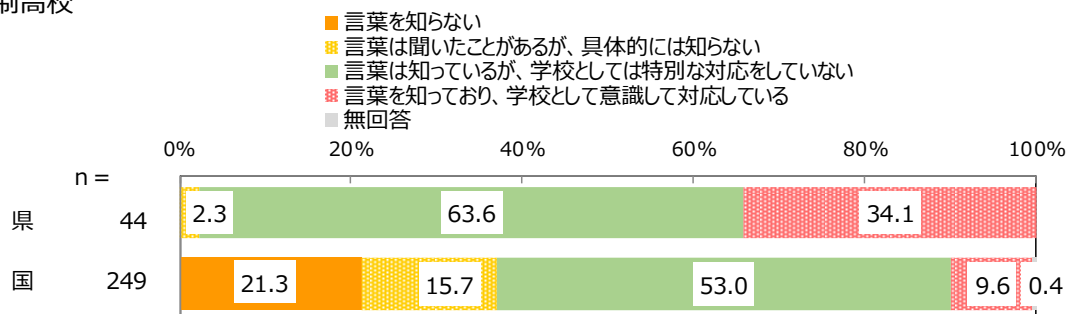
①小学校



②中学校



③全日制高校

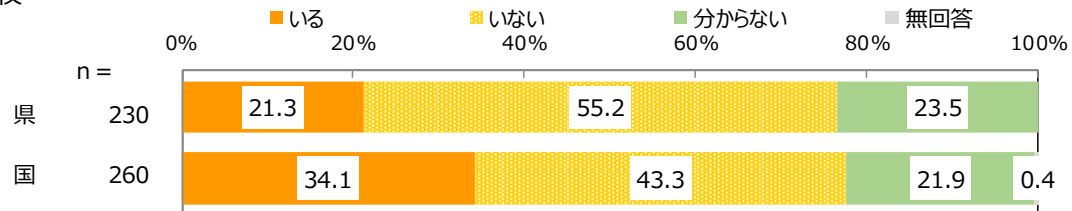


(注) 定時制高校、通信制高校は、調査数が少ないため掲載しない。

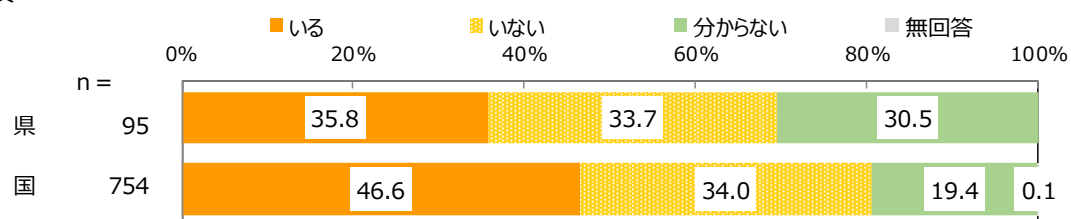
(2) 「ヤングケアラー」の定義に該当すると思われる子どもの有無

- ・「ヤングケアラー」の定義に該当すると思われる子どもが「いる」割合は、小学校で 21.3%、中学校で 35.8%、全日制高校で 40.9%となっている。
- ・国の調査と比較すると、「いる」割合はいずれも県が国よりも低くなっている。

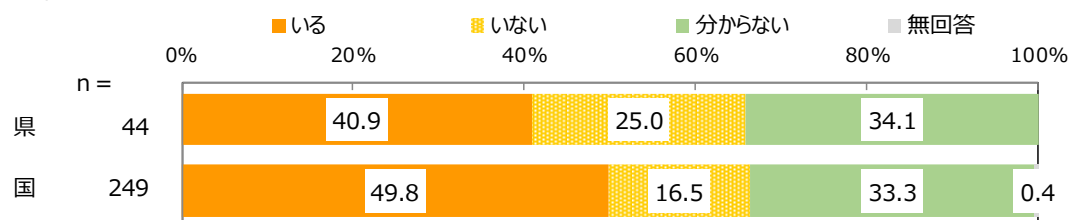
①小学校



②中学校



③全日制高校

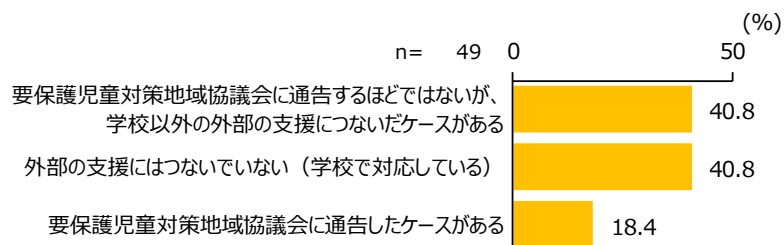


(注) 定時制高校、通信制高校は、調査数が少ないため掲載しない。

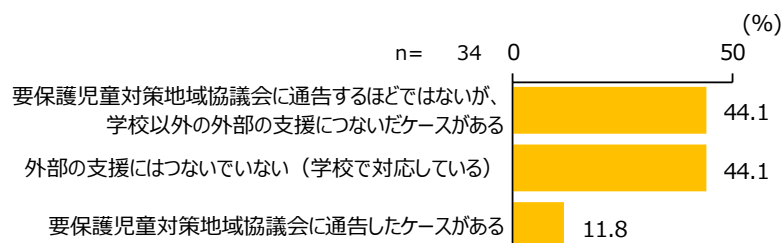
(3) 外部の支援につないだケースの有無

- ・ 外部の支援につないだケースの有無は、小学校、中学校で「要保護児童対策地域協議会に通告するほどではないが、学校以外の外部の支援につないだケースがある」、「外部の支援にはつないでいない（学校で対応している）」の割合が高くなっている。全日制高校では、「外部の支援にはつないでいない（学校で対応している）」の割合が最も高く、次いで「要保護児童対策地域協議会に通告するほどではないが、学校以外の外部の支援につないだケースがある」の割合が高くなっている。

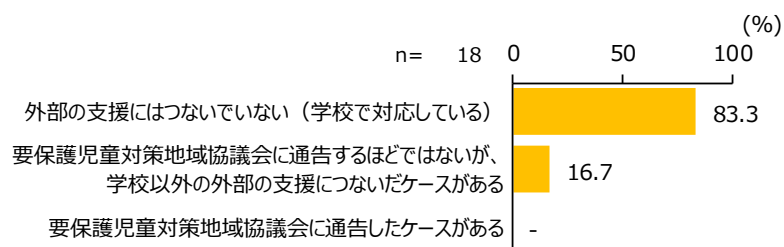
①小学校



②中学校



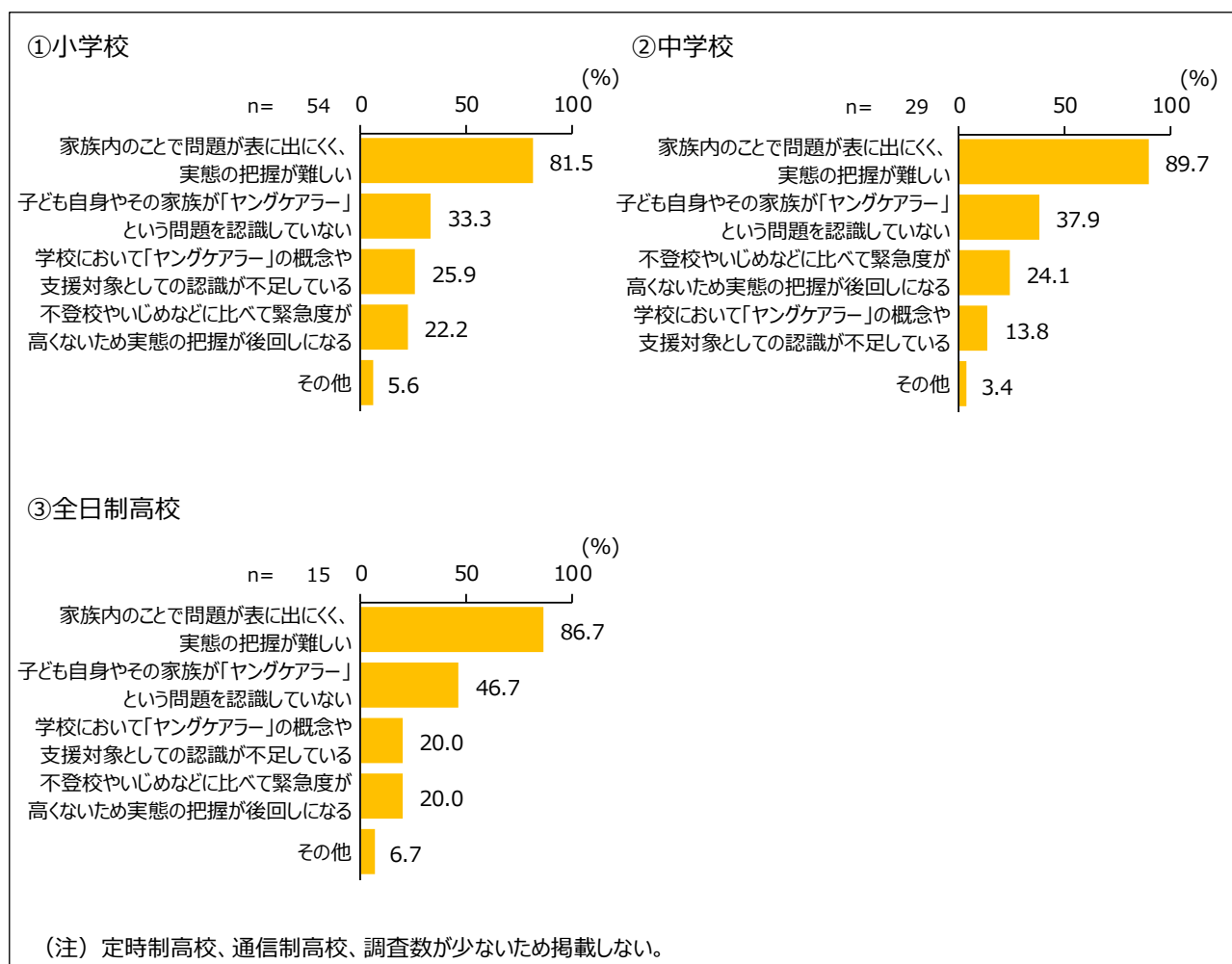
③全日制高校



(注) 定時制高校、通信制高校、調査数が少ないため掲載しない。

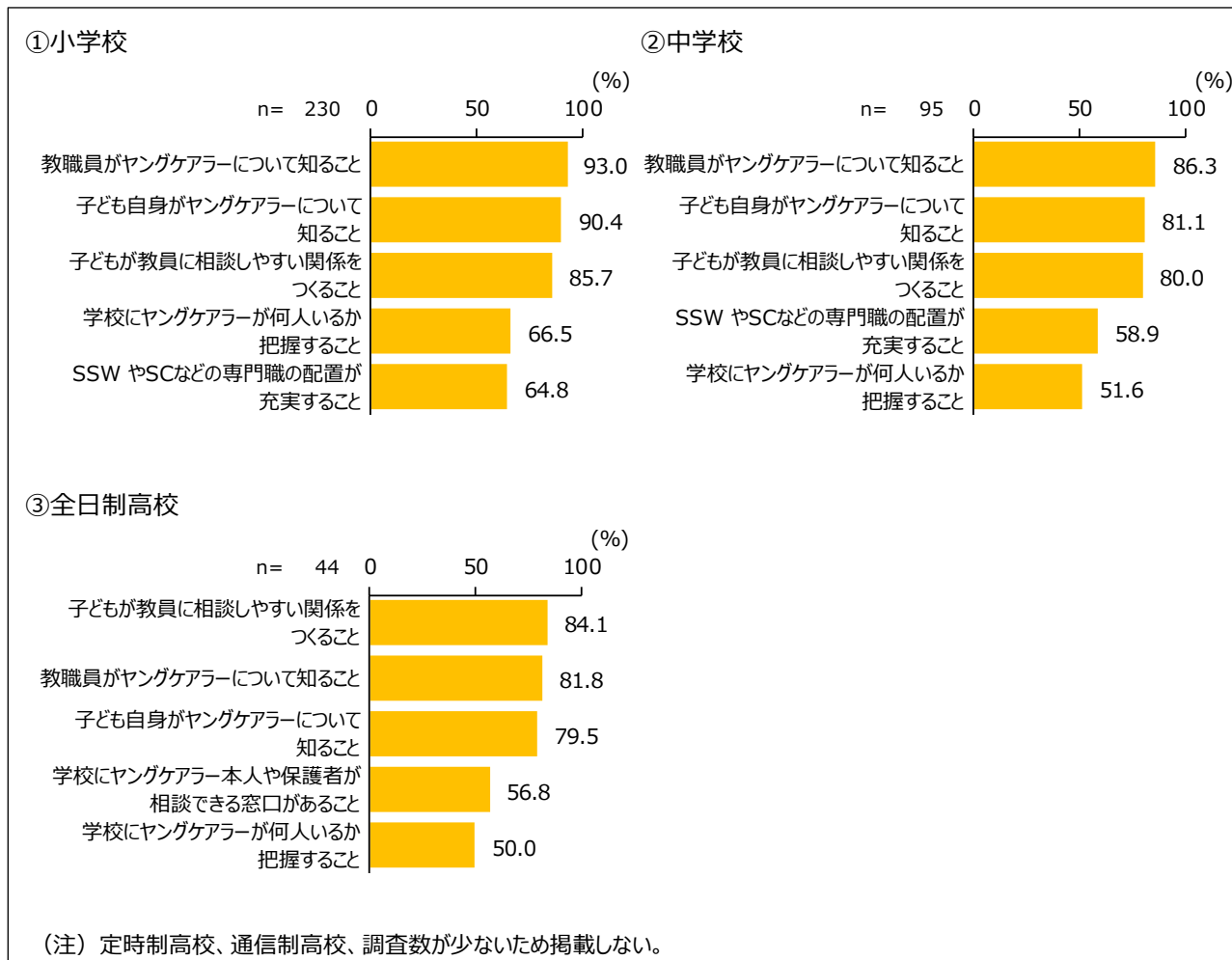
(4) 「ヤングケアラー」の定義に該当する子どもがいるか分からない理由

- ・「ヤングケアラー」の定義に該当する子どもがいるか分からない理由は、いずれも「家族内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい」の割合が最も高く、次いで「子ども自身やその家族が『ヤングケアラー』という問題を認識していない」の割合が高くなっている。



(5) ヤングケアラーを支援するために必要だと思うこと（上位5項目）

- ・ ヤングケアラーを支援するために必要だと思うことは、小学校、中学校で「教職員がヤングケアラーについて知ること」の割合が最も高く、次いで「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」の割合が高くなっている。全日制高校では「子どもが教員に相談しやすい関係をつくること」の割合が最も高く、次いで「教職員がヤングケアラーについて知ること」の割合が高くなっている。



栃木県ヤングケアラー実態調査 調査結果（速報値）概要書
令和4年10月

編集：栃木県保健福祉部こども政策課

〒320-8501 栃木県宇都宮市塙田1-1-20

電話 028-623-3067 F A X 028-623-3070